

第二十三回 玄和全国競書大会優秀作品



遠藤美代子

審査所感

玄和書道会主催の全国競書大会のレベルは高く、中央の公募展に出品したとしても決して引けを取らない作品が並ぶ。ただ今年に限って言うとう作品レベルは向上しているもの比較的平均的な作品が多かったような気がする。

一般部条幅部門では作品は基本的に「春浦調」が多く見られ、作品制作の巧さが際立っていた。また近年古典作品を基盤としての傲書的な作品も見られ、その作家の目指すところ、日頃から学習している古典が垣間見られるようで嬉しかった。

団体ごとに其々特徴が見られ、その点では多様性に富んでいて良かったが、中には書き込み不足、手本の理解不足、未消化による完成度の低い作品もあり少々残念であった。

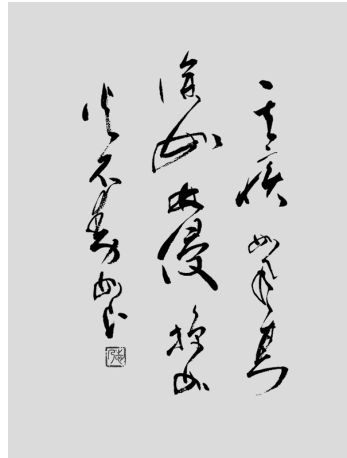
書作品は文字造形と線質の美しさが中心の芸術であり、それ以外にも全体の構成や章法等も重要になってくる。作家は常にそのことを念頭に置き制作に励んでいただきたい。

半紙作品は今回も撰文に問題のあるものが見られた。五言律詩の一部分を切り取ったものが見られたが、果たしてそれだけで意味を成すのだろうか？玄和誌の半紙参考手本をそのまま書いた為と思われるが、指導者は

— 玄和書道会賞 —



公野 珠月(高一)



佐藤 采澄



鴨井恵里奈(小三)



出井 絢菜(小四)



大村 茉優(中三)

今後この点も十分に考えてもらいたい。

また条幅作品、半紙作品共に落款が疎かになっているように感じられた。本文との調和は言うまでもなく、収めるべき位置や大きさ、落款印の位置や押印の仕方等々、本文を書く前から考慮に入れるべきである。

学生部は幼年から高校生まで力作揃いで、特に高学年になると中には一般部と遜色のない作品も見られ、今後が大いに楽しみに感じられた。小学生においては本文は大変良く書かれているのに名前が合わない作品があり、それが作品効果を下げてしまっているものもあって少々残念であった。指導者は名前まで書いて作印だということをしっかり指導してもらいたい。

以上感じるままに所感を述べたが、毎年これだけの力作を目にすると、作者や指導者の努力が十分に伝わってくる。こうした制作態度、意欲が自ずから技術の向上に繋がってくると思われる。冒頭でも述べたように全体的には高レベルの作印が多く、日頃からの書に向き合う姿勢、精進に改めて敬意を表したい。次年度は更に成熟度の増した作品、新しい傾向の作品に出合えることを期待したい。

第二十三回 玄和全国競書大会

審査委員長 三浦 士岳

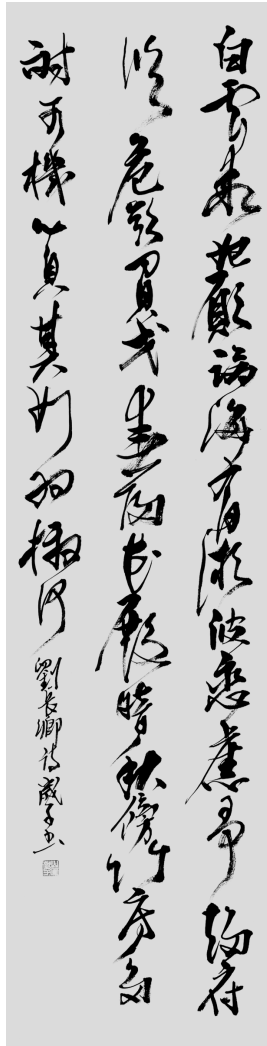
— 春 浦 賞 —



明石 有平



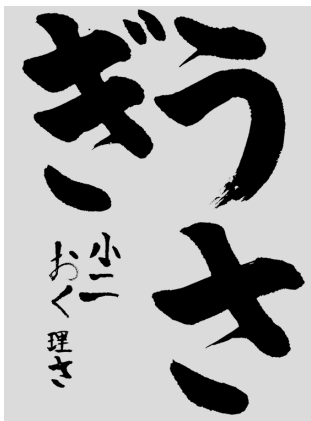
重光 絆花(高三)



山口 歳子



工藤 奈々



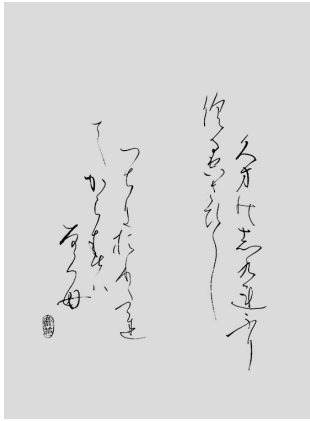
奥 理紗(小二)



小野 仁菜(小五)



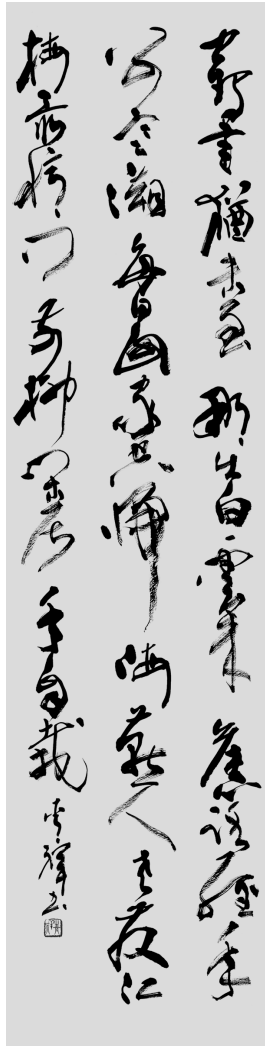
平手 晶(中二)



佐々木鶴苑



門倉 未空(高二)



竹下 青祥



大畑 守拙



グラウム 茉弥(小三)



秦 詩織(小六)



佐々木ひすい(中一)